大塚敬節
矢数道明 責任編集

近世漢方医学書集成

83

稲葉文礼
和久田叔虎 一

名著出版刊

南京中医药大学图书馆版权所有

近世漢方医学書集成 83
稲葉文礼 和久田叔虎 (一)
第Ⅲ期 全40巻

昭和五十七年二月二十五日 発行

編者 大塚敬節 矢数道明
発行者 中村安孝
発行所 株式会社 名著出版
東京都文京区小石川三ノ十ノ五
電話東京(八一五)一二七〇番(代)
振替口座 東京七—一〇四九四番

予約限定版

製版所 株式会社 日本写真製版社
印刷所 有限会社 伊藤印刷
製本所 辻本製本所

落丁本・乱丁本はお取替えします。

3347—0981—8324

責任編集

大塚敬節

矢数道明

編集委員

山田光胤

寺師睦宗

大塚恭男

矢数圭堂

松田邦夫

凡　例

一、本書第八十三巻「稲葉文礼・和久田叔虎㈠」には、『腹證奇覧』前編・後編及び『腹證奇覧翼』初編までを収録した。

一、本書は全て影印版によって収録したが、影印にあたっては次のようにした。

イ、新たに柱と頁数を付した。

ロ、底本を縮少し、一頁に半丁ずつ収めた。

ハ、裏表紙や記事のない白紙は省略した。

ニ、底本にある蔵書印及び書き込みは省略した。

ホ、印刷不明な箇所は、他の版本等により補正したところもある。

一、底本は次の通りである。

腹證奇覧前編（享和元年版）　二巻二冊（矢数道明氏所蔵）

腹證奇覧後編（享和元年成）　二巻二冊（矢数道明氏所蔵）

腹證奇覧翼初編（文化六年成）　二巻二冊（矢数道明氏所蔵）

一、解説は松田邦夫（日本東洋医学会常務理事）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

稲葉文礼と和久田叔虎

松田邦夫

代表的な腹診書

漢方の腹診法は昔からあり、傷寒論の中で既に論じているが、中国にあっては早くに亡びて伝わらず、我が国で江戸時代に後藤艮山から吉益東洞に至り古方派が興った。ここに独特の腹診の術が起こり、多くの著述が出るようになった。この腹診法は諸家の経験を加えて今日まで伝承し、実にわが国の漢方医学の特徴とされ、優れた診断法となった。

大塚敬節先生は、現代における漢方腹診法を研究して第一人者とされるが、先生によると日本の腹診法は安土桃山時代に端を発し、他に類をみない日本独自の発達をとげ、その初期は難経系

の腹診が針医、按腹師などによって開拓され、これより遅れて傷寒論系の腹診が古方家によって発明された。これらの腹診法は、多くは家伝の秘法として一般の公開を忌避して、写本のまま門人達に伝えられた。今これらの諸家の説を照合してみるに、各種の腹証の意義づけは種々雑多で、そこに統一なく、また他家の説をそのままとって自家の秘説とするものなどがある。けれども腹診がわが国の漢方の発達に与えた影響は大きく、これによって日本独自の漢方が体系づけられたと述べている。

傷寒論系の腹診書として最も有名なのは、ここに収載された稲葉文礼の『腹證奇覧』四巻と、その門人和久田叔虎の『腹證奇覧翼』八巻、合せて十二巻に及ぶ集大成で、日本における腹診書の代表的基本文献となっている。

これら日本漢方の特徴である腹診法に大きな功績を残した二人の伝記は、医史学上記載がほとんどなく、わずかに大塚敬節、矢数道明両氏らの研究があるのみである。以下の記述は、ほとんど両先生の著作に負うものである。

稲葉文礼の生立ち

文礼の生年、生地は不明である。文礼は名を克、通称を意仲(または維仲)、号を湖南といい、文礼は字である。父は文内、字を武次といって、その祖先は河野七郎から出て、代々江州(いま

の滋賀県）の菩提寺村に住んでいた。文礼は幼少の頃、両親に別れて孤児となり、青年期には放蕩無頼の徒となって京坂の間をぶらついて、悪の限りをつくした。彼は『腹證奇覧』の自序で「鄙夫野人のなすところ、大人君子の悪むところ、一としてなさざるなし」と書いている。

ところがある時、友人の言葉に感動して、医者になろうと志した。しかし学問をしたことがないので「目、書を知らず、耳、文を聞かず」という文盲であった。そこで各地の名医の門をたたいて、書物を読まないで医者になる方法をたずねて歩いた。

鶴泰栄

文礼は各地を遍歴している中に、鶴泰栄という名医にめぐりあった。この人は雲州（いまの島根県）の生まれで、吉益東洞の門人ではないが、「万病腹に根ざす」と唱えた東洞を尊敬し、古方を研究した腹診の名人であった。文礼は泰栄に師事して熱心に傷寒論系の腹診の術を学んだ。

文礼と泰栄の初対面の時期は、安永二―四年（一七七五）頃であろうと大塚敬節先生は推定する。それは寛政五年（一七九三）、和久田叔虎が文礼に逢ったとき、文礼は「吾れさきに雲州の鶴泰栄に従って診腹の法を学び、遂にもって其の術をおさめ、而して四方を遊歴し、二十年に幾きも、未だ嘗て同志の人に遇わず云々」と述べているからである。

腹候弁略

かくして泰栄のもとを去った文礼は、諸国を遊歴し、病客に遇う毎に、沈思苦慮し、或るときは宿儒老医に従って之を問い、或るときは学生小子と之を論じた。

天明六年（一七八六）に、文礼は『腹候弁略』という二巻の書物を書いている。この書では、胸脇苦満、心下痞硬というような腹証がどんな形状のものかを説明している。その頃文礼は江戸にきて京橋に住んでいたらしい。『傷寒論文学攷』の著者伊藤鳳山との交遊も、この頃のことである。

この珍本は矢数道明先生の所蔵である。

徳本十九方

寛政四年（一七九二）、文礼は甲州（いまの山梨県）に遊んで、黒川の里の禅寺に泊った。その寺に、はからずも永田徳本の『奇方十九方』があって、偶然その処方を知ることができたといって大喜びであった。この処方は『腹證奇覧』の中にも出ているが、『小島蕉園随筆集』によると、徳本十九方は、教えるのを惜しんだ寺僧が偽って書いて見せたものであったという。

文礼と叔虎の出会い

寛政五年（一七九三）甲州からの帰路、遠州（いまの静岡県）浜松で文礼は和久田叔虎とはじめて会った。その時、文礼は、自分の術を伝えるに足る人物に始めて逢ったといって喜び、数カ月間、ここに滞在して、自分の修得した腹診の法を残さず叔虎に伝えてから、西の方を指して旅立った。

和久田叔虎は浜松の人で、生年は不明である。名を寅といい、叔虎と号した。幼時にして父をうしない、病身の母を看病するうちに、近隣の医者が頼りにならないので、医を志し、古医書を読むのを好んだ。叔虎が文礼に会ったときはすでにかなりの学識を修めていて、文礼を感心させたことが想像される。

腹 證 図 彙

叔虎に別れた文礼は、腹診の術を拡めるために京都に行き、ここに落ちついた。時に寛政七年（一七九五）のことである。ところがその頃の京都には、吉益南涯、和田東郭、荻野台州などの名医がその俊才博識、優れた言行によって羽ぶりをきかせている時で、文礼のような学問もなく、言動が鄙俗な野人は軽蔑を受けるのみで、わずかに一、二の弟子が出来て一緒に少数の病人を治

療し、たまに治療できたことはあっても、攻撃療法に過ぎたりして、治療成績をあげられず、文礼の術はあまり行われなかったらしい。元来酒好きの文礼は、その憂欝をまぎらすために毎日酒をのんだ。彼は寛政九年（一七九七）に半身不随になった。この時は、自分の治療で全快したが、病気がよくなるとまた弟子や親戚の忠告にも拘らず、また酒を飲んだ。彼は何回も半身不随になった。その頃、門人の関宗俊は師に代って、『腹證図彙』を書いた。

文礼の性格について、門人の宗輔は、『腹證奇覧』の序で「先生、性直にして術精し。然れどもその言行、殆んど京師の人に非ず。たとい先生をして京師に留寓せしむるも、恐らくは（腹診術を以て、広く海内に施さんとする）素意の如くなること能わざらん。美器あって其の用をなさず。惜しむべき哉」と述べている。

腹證奇覧

文礼は寛政十一年（一七九九）に『腹證奇覧』四巻を著した。この書は傷寒論、金匱要略によって腹証を図示したもので、文筆にうとい彼は、門人達に口述して書かせたものである。奥付けをみると寛政十二年（一八〇〇）夏五月に出版されている。本書は、さきの『腹證図彙』の増補改訂版である。

実地に鍛えた術を体得していた文礼は自ら「文事に於ては、則ち吾れ能くせざれども、医事に

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

当りては、則ち師に譲らず。とりわけ診腹の術に精し」と云い、また、「予の為す所は、大いに今の医に異るなり。予、世の医を見るに、論巧みなるも術拙し。予は、古人の言と雖も、治病に効無きものは捨て取らず、今人の方と雖も、回生に功有るものは択びて之を用う。之を病者に徴するのみ。」と実証精神を述べている。

はじめに腹診は、武士が武器を持って敵に向かうように、心を鎮めて病の軽重、予後、病人の富貴、貧賤に拘らず、ただ病苦を救わんとのみの心で行えと心得を説いている。

この書は腹部のみならず、胸部に心煩をえがき、背診を記述し、特にユーモラスな絵をもって病者の全体像を書き記して、望診を表現しようと努めている。

もとより腹証を一枚の画を以てすべて示すことの困難は、云うまでもない。たとえば心下痞硬と胸脇苦満の区別など、絵だけではわからない。本来腹診を書物によって伝受するには限界があり、師匠が手に取って教え、また実地に治験を重ねることによって病者より教えられるものである。しかもなお本書には、自得した腹診の術を後世に残さんとする文礼の祈りがこめられており腹診秘伝書の本邦初公開という歴史的意義を有する名著であることは冒頭に述べた通りである。

本書中、蠟燭下疳で陰茎脱落し痛み忍び難き患者を大承気湯で治癒せしめる項などは、文礼が治術に秀でていたことが窺える。

また文礼は古方ばかりでなく、後世方の腹証もとりあげており、榧実方など民間療法にまで及

んでいることが注目される。

読腹證奇覧

一方、和久田叔虎は寛政十年（一七九八）に浜松から江戸に移住した。『読腹證奇覧』の自序の中で、「余は故あって家を提え東都に遷り、相距ること数百里、音信甚だ疎なり。又事故に遇い、窘迫しきりに至る」とあることから、何か不幸な事故のため困窮の生活を送っていたらしい。ところで、叔虎は寛政十二年（一八〇〇）の冬、（『読腹證奇覧』では享和元年〈一八〇一〉の春となっている）、街の本屋をのぞいてみたら『腹證奇覧』というものが目についた。それは先年、浜松で別れた師匠稲葉文礼の著述であった。叔虎は胸を躍らせて読んでみると、意に満たぬところがあまりに多いことに失望した。叔虎はその罪を表面的には門人達に帰し、『読腹證奇覧』二冊を著わした。奇覧の説はあちこち間違っている、絵もまずいし、書いてあることがいけない、ということで、痛烈な批評を加え、絵を書き直している。この書を書いて数年して『腹證奇覧翼』を書いたわけであるから珍しい本であり、臨床的にも興味がもたれる。東京医科大学図書館が所蔵し、石原明、矢数道明両氏が紹介した。著作年代は享和二年（一八〇二）頃と矢数道明氏は推定している。

叔虎の指摘は、たとえば「其の腹診の詳らかなることは口授」とあるところは、凡そ公に刊行

する著書に、口伝口授などと書くことは大人君子のすることではない。人を惑わすばかりで益がない。翁の失策であると責め、桃軍円の証について、世に公にするのに私名を以てしては通用しない。徒らに奇を好み、名を売り、利をむさぼる者のするところと云い、磁石丸の証について、処方を載せないのは、徒らに方名の奇を羨やましむるばかりで、世のため何の益もないなどと極めてきびしい批判を加えている。

ただ呉茱萸湯の腹証と小柴胡湯の腹証とが全然区別がつかないと、叔虎が非難しているところを大塚敬節先生は、これは文礼の経験から出たところで、実際にそうであり、文礼の方が偉いとほめている。

さて叔虎は、『読腹證奇覧』を公にするつもりはなかった。しかし師文礼の名で公刊された『腹證奇覧』の欠陥をそのままに放置できず、遠く関西の地に赴き、文礼の所在をたずね、親しく討論して、以て「奇覧」の欠点を補いたいと志した。

師弟の再会

享和三年（一八〇三）の秋、叔虎は西下して、ようやく文礼の浪花の住居をみつけることができた。こうして師と弟子は十年ぶりの再会を大いによろこんだ。誠にこの二人の関係をみると、師弟の愛情と、学問のきびしさを教えられる思いがする。

叔虎は江戸に帰ることをやめて、京坂の間にとどまることを決心し、たびたび文礼をたずねて医事を談じたが、話題はいつも腹診に関することばかりであった。そうこうしているうちに、文礼の病は重くなり、再起が不能であることをさとると、文礼は叔虎に後事を托して、『腹證奇覧』を増補して完全なものにしてくれと云った。そして、文化二年（一八〇五）の六月に浪花の家で死んだ。その年齢は不明のままである。

腹證奇覧翼

叔虎は文化四年（一八〇七）京都に移り、翌々年文化六年（一八〇九）、『腹證奇覧翼』初編二冊を刊行した。

本書の目的は、自序に「翁（稲葉文礼）は素、文辞を学ばず。専ら診腹の一技を修す。故に其の著すところ、皆門人、二、三子の口授筆記するところ、遺闕なしとせず。此の書、奇覧に依りて、其の闕たるを補い、其の遺せるを拾い、加うるに余が千慮の一得を以て之を羽翼す」とあるのを以て尽くされている。

『腹證奇覧』と同じく傷寒論、金匱要略の条文を引用して其の腹証を示し、註釈を加えている。文礼は初めて叔虎に会ったときにわが道を伝える足る人材とよろこんだが、『腹證奇覧』の「誤遺」を叔虎に指摘されたとき、文礼は叔虎の造詣の深遠なことに今更ながら驚いたことであろう。奇

覧が臨床術書であるのにたいし、翼は古籍を精究して学・術を兼ねた書である。

『腹證奇覧翼』の第二編二冊が刊行されたのは、初編が出て二十四年も過ぎた天保四年（一八三三）であり、第三篇と第四篇の四冊の出版は、さらに二十年を過ぎた嘉永六年（一八五三）であり、全八冊を以て完成している。叔虎が在世したのは初篇刊行時のみで、第二篇刊行の天保四年（一八三三）には既に他界の後であろうと矢数道明氏は述べている。叔虎の死去の年は不明である。

『腹證奇覧翼』の初篇と第二編は奇覧を通じての圧巻ともいうべき篇で、文勢、内容から叔虎が自ら記述したと思われる。冒頭に傷寒論・金匱要略を尊重すべきことを説き、腹診の手技を図示している。文は傷寒・金匱を丁寧に引用して叔虎の学識の深さを窺わせ、図は奇覧よりも理解しやすく、実際に近い。

第三、四篇は、引用古籍の訓点、ふり仮名は叔虎の趣旨にそぐわないところが散見され、記述から見て叔虎の域には遙かに及んでいないと上田晋平氏は述べている。

結び

稲葉文礼、和久田叔虎は生前は不遇であったが、不朽の名著を残し、彼らの死後に広く流布されるに至った。

『腹證奇覧』ならびに『腹證奇覧翼』は、たしかに江戸時代の腹診の書としてすぐれたものであ

り、従来両書を以て、傷寒論系腹診の代表として比較的無批判に受け入れた傾向があった。しかし実際にはこれと符合することは少なく、各自の経験を通じて、腹診の尺度がなされていた。

腹診の術は、日本で特に発達したものであるが、難経系も傷寒論系も、未だともに統一がなされていない。その代表的な相違は、腹證奇覧と翼の相異にみられる。特に『読腹證奇覧』を読んで、一層その感を深くする。

文礼、叔虎の時代よりも進んだ腹診法を学ぶことのできる私達は幸せであるが、腹診法は未完成のままである。今後鋭敏な感覚と冷静な観察による経験を集積してゆくとともに、大塚敬節先生の云われるように腹証の近代医学的裏付けが大切である。医学の進歩によって病態把握がより精密化された今日こそ、腹証の本態の追究に新しい発展が期待される。それこそ先人よりこの遺産を受け継いだ私達の重大な責務であろう。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com